

ナガタケ イセキ カゾシ オオゴシ
長竹遺跡(加須市大越)

平成 22 年度第7回遺跡見学会資料

平成23年2月5日 (土) 開催

本 跡
加須市大越 長竹遺跡



掘れば掘るほど見えてくる

第一面

はじめに地表下1mで古代～近世の調査

さらに1m下で縄文時代の調査

第二面



はじめに・・・

長竹遺跡の発掘調査は、利根川堤防の強化工事に先立ち行われています。

これまでに、縄文時代から弥生時代、奈良時代から中世・近世に至る遺構や遺物が見つかっています。

加須市周辺は「関東造盆地運動」かんとうぞうぼんちゆうんどうによって土地が少しずつ沈下しています。一方、繰り返される洪水で土がつもるため、むかしの人々が暮らした地面は地中深く埋まってしまいました。

長竹遺跡では、地下1mで見つかる奈良時代以降の生活面（第一面）を調査した後、さらに1m近く掘り下げ、縄文時代の生活面（第二面）を調査しています。

主催：財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団／埼玉県教育委員会
共催：国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所／加須市教育委員会



《↓溝跡に埋もれた中世》

長竹遺跡の発掘は、調査区をA～C区に分け、それぞれ二つの生活面を調査します。これまでにA区の一部とB区第一面の調査が完了し、奈良・平安時代の^{たてあな}竪穴住居跡や中・近世の溝跡群、井戸跡などが見つかっています。

溝跡の中からは、^{いたいしとうぼ}板石塔婆（^{いたび}板碑）の完品が出土しています。嘉元三年（1305）や文保二年（1318）、^{かげん}慶安年間（1362・63）の^{めい}銘が記されたものがあり、鎌倉時代末から室町時代にかけてつくられた^{くようとう}供養塔群が、後世になり溝に捨てられてしまったようです。

また、溝跡からは、馬の骨がたくさん出土しました。全身がそろっていないため、別の場所で解体してから捨てられたことがわかります。





鎌倉時代末の板石塔婆出土状況

近世の井戸跡と近代の打ち込み杭



近世の溝跡群と近代の堤防補強工事跡

きゅうていぼう
《← ↑ 利根川の旧堤防跡》

板石塔婆が捨てられた溝跡の上には、利根川の旧堤防がありました。上段の航空写真で調査区から左下の竹林をたどれば、その名残である曲線が見て取れます。

板石塔婆の年号から、堤防が14世紀以降、近世にかけて築かれたこともわかりました。また、左の写真に見える、深さ3m以上も地中に刺さる杭の列は、近代に堤防が改修されたとき、堤内側の裾に打ち込まれたものです。

の調査



掘れば掘るほど解けてきた!

奈良・平安時代



奈良時代の竖穴住居跡

《↑古代の流通を^{かいま}垣間みる》

奈良・平安時代の竖穴住居跡は、
これまで10軒見つかっています。

床面や埋土^{まいど}の中からは、^{のぼ}登り窯で焼
かれた灰色の器^{うつわ}（^{すえき}須恵器）が出土
しました。須恵器は、使われた粘土や
技法で産地を見分けることができます。



竪穴住居跡のカマド

《↑そのまま残るカマド》

竪穴住居跡の一边には、火を焚くカマドが設けられています。普通は壊れてしましますが、上の写真は赤く焼けた側壁や天井、煙道のトンネルまでもが残る、珍しい例です。



中世溝跡の断面と縄文時代遺物包含層（第二面）

長竹遺跡からは、武蔵国内の鳩山窯跡群だけでなく、茨城県の新治窯跡群や三和窯跡群、栃木県の三叢窯跡群の他、群馬県産と思われる製品も出土しています。

「国境の邑」らしい、多彩な物資の流通を想像することができます。

《←上が低地／下は台地??》

左写真の土層断面では、中世の溝跡3本が位置と深さを違えながら重なり合っているようですがわかります。薄茶色の土は、利根川の氾濫がもたらした低地の土で、古墳時代以降の遺物を含みます。

これに対し、下方の黒い土は、縄文時代から弥生時代の遺物を含んでいます。この地が沈降する前、起伏に富んだ台地であった頃に積もった土です。



どくうです・・・

縄文時代後期・晩期

第二面の調査

《↑遺物包含層の調査》 ほうがんそう

この地がかつて台地だった頃の地層には、縄文時代早期（約9,000年前）から弥生時代中期（約2,000年前）まで、およそ7,000年の歴史が封じ込まれています。

遺物を含む層は厚さ1m以上におよび、縄文時代後期から晩期（約3,500年前）にかけての土器や石器を中心に、膨大な量の遺物が出土しています。
ほうだい

重ねて埋められていた縄文土器

《↑包含層中の遺構》

現在、調査はB区第二面の遺物包含層を掘り進み、その途中で見つかる^{たてあな}堅穴住居跡などの遺構を詳しく調べています。

上の写真は、わざと打ち欠いた^{ふかばち}深鉢と^{あさ}浅鉢の破片を下に敷き、完全な形の小さい^{さい}深鉢を埋め込んでいます。^{さいそうこつ}再葬骨を納めたものかもしれません。



土偶の右足

《←↑縄文のおしゃれといのり》

縄文時代後期から晩期にかけては、他の時期にも増して装飾品やまつりの道具を作ります。長竹遺跡でも多くのペンダント・ビーズ類や耳飾り（ピアス）、祈りの道具である^{どくう}土偶や^{せきぼう}石棒・^{せっけん}石剣、お酒？を飲み交わすための^{どびん}土瓶に似た^{ちゆうこう}注口土器などが出土しています。

縄文さんのピアス



第一面の調査



点線は利根川旧堤防の痕跡



掘れば掘るほど解

奈良・平安

見学会集合場所



右側が利根川の土手



左手の竹林方向が今回の発掘調査場所

土手の上を歩く



左手の竹林方向が今回の発掘調査場所



左手の竹林方向が今回の発掘調査場所

利根川から対岸の方を見る



約150名を4班に分けて見学



青いシートの部分が調査場所













地下1mで見つかる奈良時代以降の生活面(第一面)



中央正面は松浦千代子



奈良時代の竪穴住居跡とのこと(左はカマドの跡、正面が井戸の跡)



長竹遺跡からは、武蔵国内の鳩山窯跡群だけでなく、茨城県の新治窯跡群や三和窯跡群、栃木県の三毳窯跡群の他、群馬県産と思われる製品も出土している



「国境の邑」らしい、多彩な物資の流通が想像できる



こちらはさらに1m近く掘り下げた縄文時代の生活面(第二面)



埼玉県埋蔵文化財調査事業団の解説者



この地層の違いは利根川の氾濫時の堆積物(古墳時代以降の遺物を含む)とのこと(下方の黒い土は、縄文時代から弥生時代)









この木杭は徳川幕府による堤防の改修時のものとこと







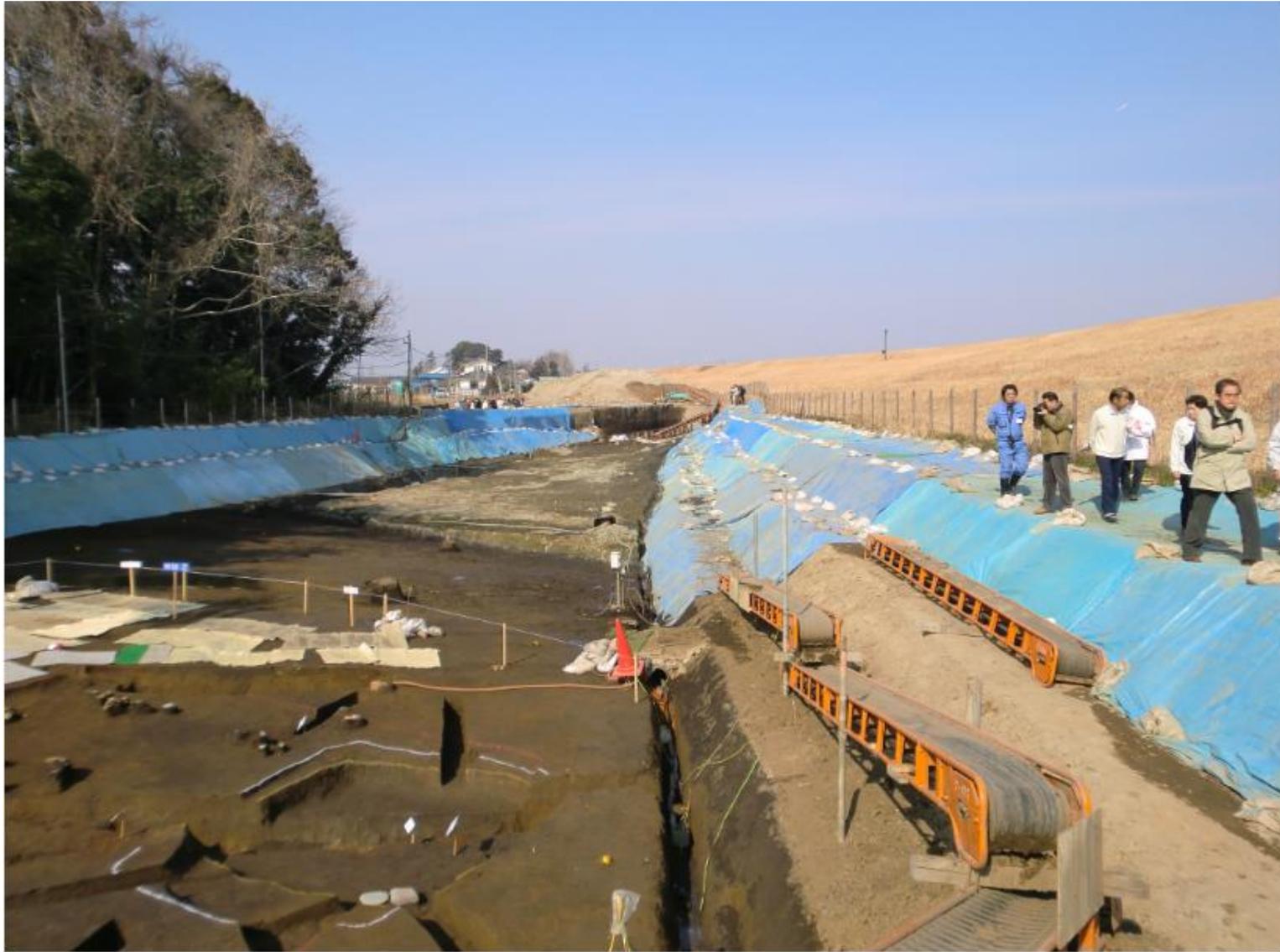


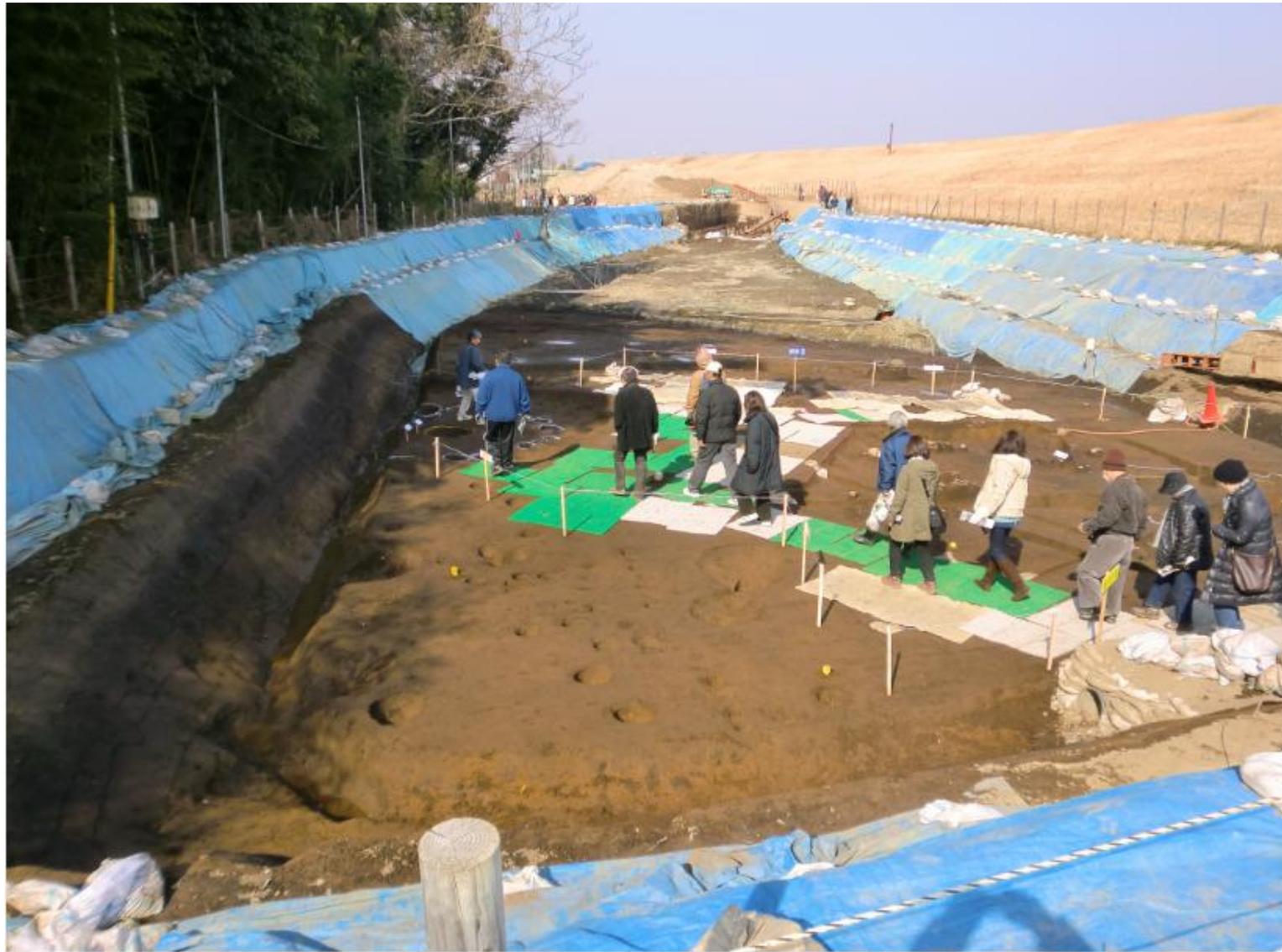
多くのペンダント・ビーズ類や耳飾り(ピアス)、祈りの道具である土偶や石棒・石剣、お酒を飲み交わすための土瓶に似た注口土器などが出土している













縄文時代後期から晩期にかけての竪穴住居跡とのこと



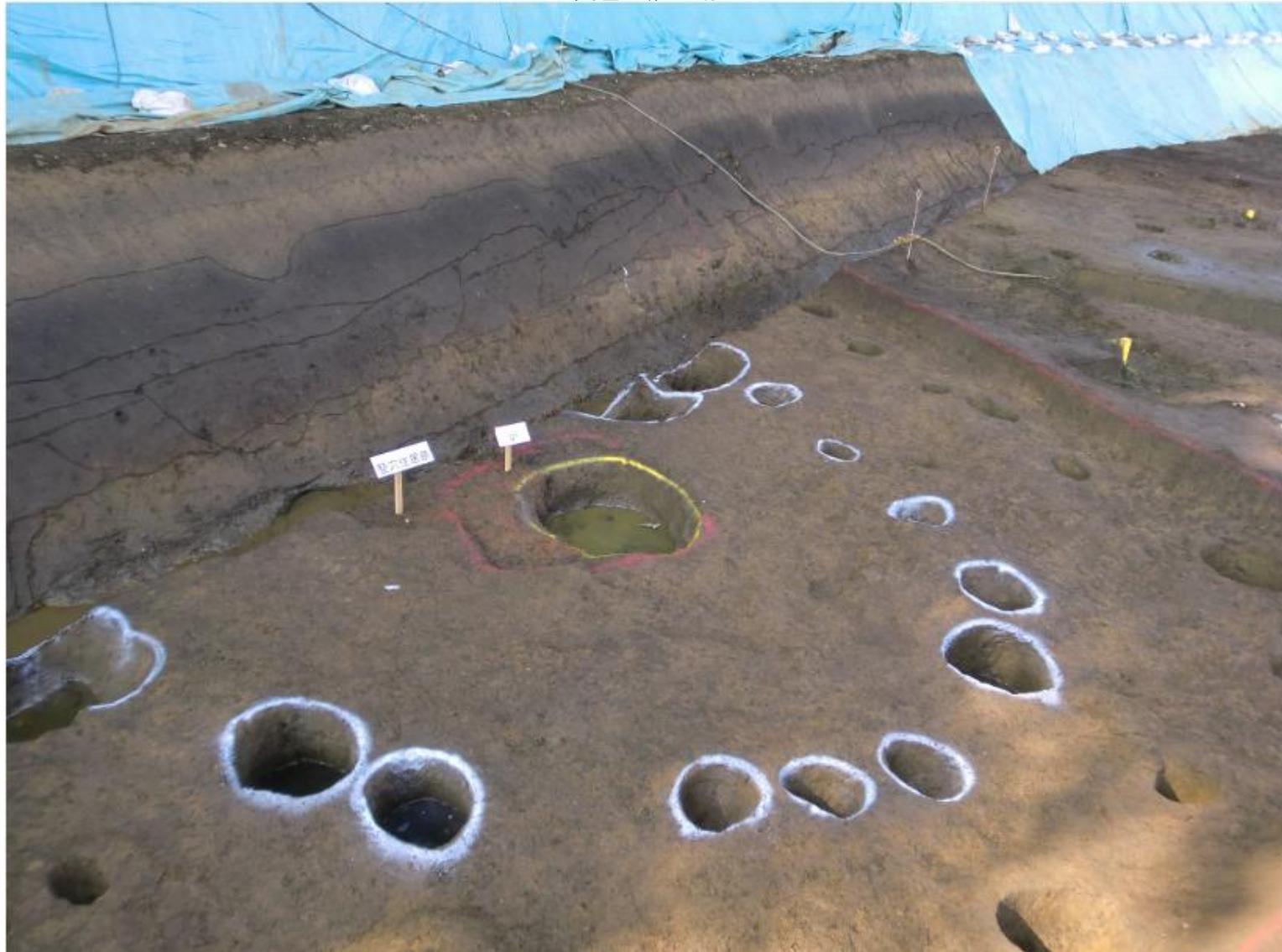
黄色は炉の跡



柱の跡が周囲に並ぶ珍しいタイプとのこと



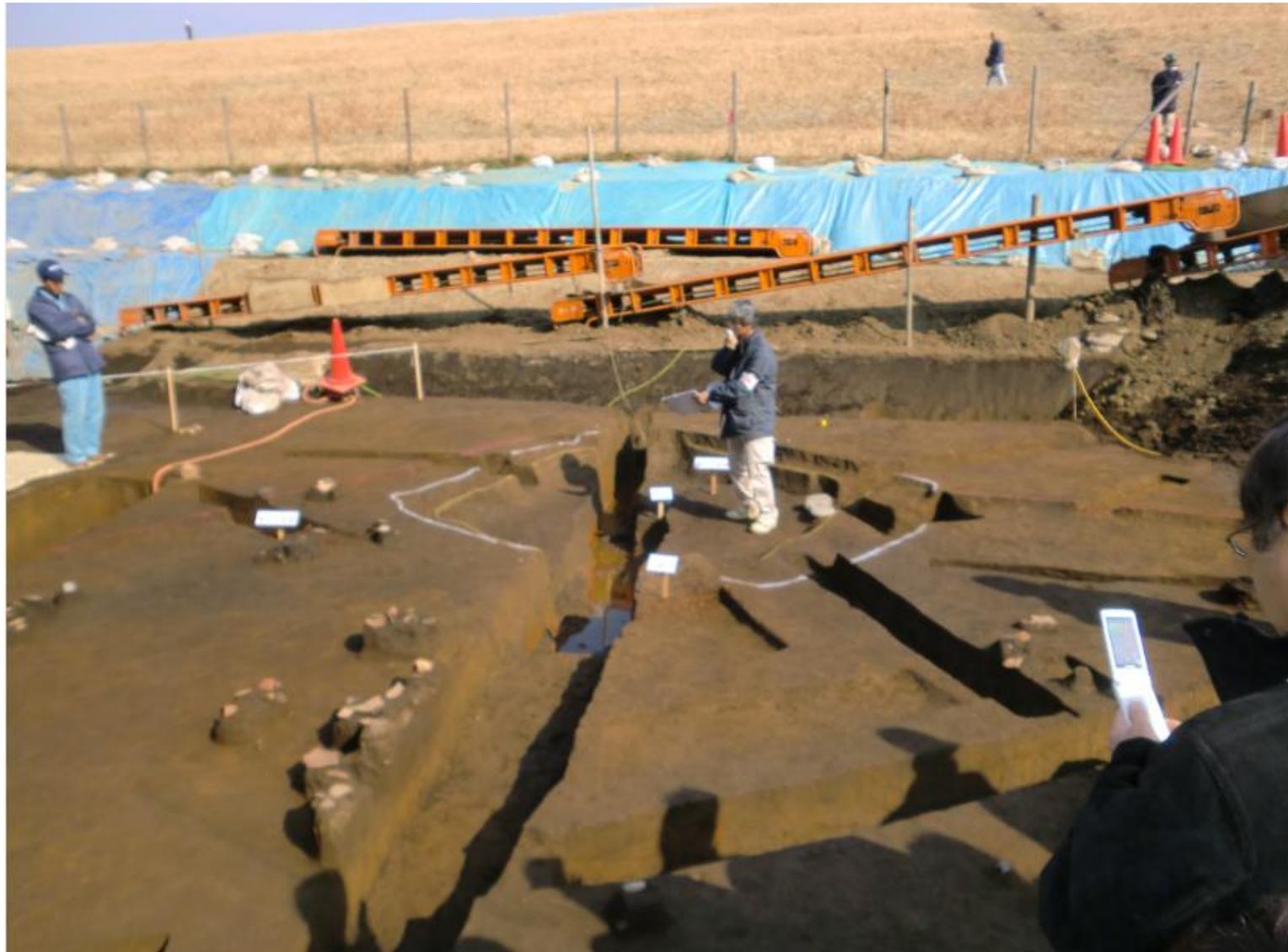
黄色は炉の跡



縄文時代早期から弥生時代中期まで、およそ7,000年の歴史が封じこまれている









出土した遺物の展示場







遺跡見学会会場
(駐車場あり)

